

## ニーズとしてのわくわく

池田隆美（福岡）

### 要旨

キーワード：

#### 1) はじめに

「でも、そのときまで、ぼくは今と同じように関わり続けるであろう。歓びの教育学、ぼくがそうであるように、ボヘミアンでかつトロピカルな教育学、笑いの教育学、問いと好奇心の教育学、今日を経由する明日の教育学、世界変革の可能性を信ずる教育学、可能性としての歴史を信ずる教育学に、である。」

（パウロフレイレを読む）より

現代日本の教育の状況は、情報資本主義の本格化とともにいよいよ資本主義化の本段階に入っていくとば口にさしかかっているといつてよいだろう。教育それ自身が、財やサービスとして消費されていくプロセスとして成立し、舞台が国家の管理下における公教育から経済活動の対象としての教育市場へと移りはじめ、そしてその継続性を図るという意味で、生涯学習という市場の成立が求められている。

そのことは、私たちにとって頭脳や身体そして精神をも、商品として評価取り引きし、操作することにほかならないし、育児や介護も（そしてすでに恋愛も結婚も）資本主義的な観点から、ビジネスの対象になる。

そこでの教育という営みは、商品化という文脈を強く意味づけ（刻印）されていくだろう。しかし、そこでも私たちの消費欲望は、満足することはないであろう。さまざまな方法が考え出され、さまざまな教育システムが産みだされていくであろうし、さまざまな教育へのニーズが叫ばれていくであろうが（コンピュータリテラシー、国際理解、生涯学習、カウンセリングなどなど）、消費の対象となる内容や方法についてのニーズについていくら検討をしても、人間の商品化というその流れ自体を対象化することはできないし、その意味で私たちの意識（＝文化＝コミュニケーション）における人間の解体、「こころやからだ」の商品化はとどまらない。教育という現象を覆うからくりを私たちが学ぶということ。私たちの「生きられる」時間と空間をつくりだしていきけるような知識や意識の（＝文化の）生産者＝消費者としての立場に、自分自身をおくことを学ぶということ。そのようなニーズを再認識していくこと。そして、そのうえで主体としての人間でありつづけることが、意識と無意識がまるごと商品化していこうとする今、改めて求められている。

以上のような課題を理解し、それに対処する一歩として、私たちの教室という場でのもっとも

基本的な関係の仕方を、アドラー心理学の観点に立ってみていきたい。

## 2) 学び方を学ぶ

わくわくしたり、うきうきしたり、ドキドキしたり、背中があせでぬれたり、心臓がどくんどくんだり、はったり、「Ah Haaa」なかんじになったり、なんかひらけたような気がしたり、「イエイ」と友達と手をばちつとぶつけてみたくなったり、ほっとしてらくーになったり、涙がにじんできたり、というからだところの躍動感というのが、たのしい授業に（いつもではないにしても）つきものだと思う。少なくとも、いらいらしたり、なにかという気が重くなったり、無理にさせられている感じがしたり、というからだところが死ぬような感情は、たのしい授業に起きてきにくいのではないかと思う。

教育という活動が、「学ぶ」ということにあると定義してみる。そこでまず大事なのは、「学ぶ」ということをどういうスタイルでおこなうか、ということはどう学ぶかということではないかと思う。つまり学び方を学ぶ、という課題が私たちの前にあるわけである。そしてその課題の解決をみつけだしていくめやすが上記の「わくわく」などという情動にあるのではないかと思える。

## 3) 前提としての関係性＝教師の都合

ここでは、わたしたちの多くの経験からもあきらかなように、私たち教師の課題として、生徒と教師の関係をどう形作るかということが、学び方を学ぶという前提として存在するのではないか。

少なくとも、教室に行くのが気が重くなく、教師自身「わくわく」して今日この時間何が起きるのか、どんなおつきあいが起こるのか、期待してのぞめるという関係、つまり自分自身生徒との関係になにほどか貢献したい（それが私利私欲であっても）というか、あの子と今日はどんな会話ができるのかなとか（これもやはり私利私欲）、こころがなごむというか、はずむというか、そんな感情を教師自身ももてて、そんな雰囲気クラスで共有できるというのが、大切ではないかと思う。

そういう関係で、はじめて自分を抑えつけないで学ぶという学び方を学ぶことがどんなものか、教師に見えてくるのかもしれない。

まず、この部分での「わくわく」も教育のニーズであると思う。

## 4) 教師のわくわくは生徒のわくわくになりうるか

私たち教師がクラスで何をしているかという、自分のために私利私欲にうちふるえてクラスに行き、そして生徒と呼ばれる人達とコミュニケーションをしているのである。そのコミュニケーションが自分（教師）にとってわくわくするものであったほうがいい、というのは上に書いてみたのだが、生徒とよばれる人達にとっても、わくわくするコミュニケーションの実際のありかたや、それを実現するための方法を体験することは、それ自体わくわくすることかもしれない。

そういう体験を提供したいと意志する教師の活動によって、生徒がもつそういうニーズ（生徒自身のわくわくして人生を体験してみたいという私利私欲）が、クラスという場で発現する可能

性は十分あると思う。そして、それは生徒と教師のコミュニケーションのありかたによって大きく形作られていくもので、だからこそ、この世で2度とないそのメンバーでの当意即妙な言葉のやり取りだとか、表情だとか、雰囲気というものが、「わたし」や、もしかして「わたしたち」にとって、大切にいとおしく思える（ようになる）のかもかもしれない。

## 5) 共同作業としての授業

生徒との会話というか、コミュニケーションの話（活動）のねたに教科というものがあり、その教科への評価や内容の読みとりや意味づけ自体が生徒たちとの共同作業になっていく過程が、私たちにとってのニーズである、といってもいいのだろう。そしてそれは繰り返しになるが、わくわくという感情をとまなうようなニーズであったほうがよいのである（私利私欲にもとづいて）。

そのような関係をつくりだしてくれる教師の在り方を支え、生徒役の人達と気がねなく交流できる教育のスタイルなり、授業方法を、「わたし」が見出し、身につけ、実践していくのは、わたしにとって楽しみであり、またそうでなくてはならないものである。

一人一人の教師役の人が、明確に、自分自身にも他者にも適切な行動（という意味づけ）を見出し続けていければ、そしてそのためのツールとして教育の方法を探って実践していければ、その関係はわくわくしたものに变质していく（可能性をもつ）のであり、そこでのニーズ、つまり「わたし」と「わたしたち」のわくわくを作り出すというニーズは、教育ということがらが持ち続けるニーズのひとつではないかと思う。

## 6) 「わたし」の決意

私たちがアドラーのアクティビティ（カウンセリングなど）に参加して、「ああ、今日も楽しかったな」「なんかしらんけど、行ってよかった」「この次も行ってみよう」と思うのは、わくわく、ドキドキするからではないかと思う。

今まであたりまえに考えていたことが、ここちよい驚きとともに否定され、自分で気づいて新しいやりかたを実験してみようとやる気が起こる。ああしてもこうしても、どうしてもだめだったことに気づいて、ちがう見方をしてみようと決断する。そこでの、自分の人生は自分で決めることへのずっしりとした腹の決め方、こういう人生への意味づけが、それぞれの各人の責任でおこなわれていく。

## 7) 「わたし」と授業テクニック（私利私欲実現のために）

それでは、そういう体験をしたく決意し続ける「わたし」が使う教室での技法は何かないものだろうか。みなと一緒に生きることの楽しみを味わえ、意味づけの楽しみを味わうことができる技法はないものだろうか。それは他者操作的な（=いやらしい管理であり、「生きられる時間」の共有へはたどりつかない）方法とは違い、きちんと教室の世界が横の関係でありつづけ得る技法であるというような。

「わたし」がアドラーのカウンセリング構造を理解すればするほど、そのような技法を「わた

し」が再発見し、使えるようになってくるのではないかと思う。技法に「わたし」が意味づけするといえるので、上記のようなく決意し続ける「わたし」が、自分の人生を生きるようになって初めて、クラスで技法を使うことができるようになり、そして、いきいきわくわく教師として（私利私欲にうちふるえつつ）ふるまえるようになるのではないかと思う。

## 8) アドラー心理学による関係づくり＝わたしとわたしたち

まず、わたしたちがクラスのなかで生きる、ということについていえば、アドラー心理学の思想や技法がわたしたちの視野に入って来ると思う。それは、クラス運営や生徒とのかかわりでおこなわれるもので、今まで多くの実践がなされていると思う。

アドラー心理学によるものだけがそうであるなどとはいえないことはもちろんであるが、ここでは実践の代表としてその名前をあげておく。

## 9) 世界と出会う＝わたしが世界を定義し、操作支配する

世界を「わたし」の手にとりかえし、地球上の存在にたいする一つの意味づけを「わたし」の手でおこない、そのおもしろさを味わう、という方法は、これからもわくわくという情動を体験させてくれる主要なものだと思う。

その流れに属するものとして、ものづくり＝伝統社会の技術（職人のもののみかた）の体験学習や科学を直接体験できる仮設実験授業などがあると思う。

ものづくりについては、実際やってみようとした子どもが決意したら、たたら製鉄でも、ログハウスづくりでも、かみすきでも、糸づくりから布をつくるという活動でもできるし（それはローテクテクノロジーかもしれないけど、原体験として人間がふまえていいものの一つだと思う。）、実際、養護学校や小学校で実践されている方も多いと思う。私も養護学校で牛乳パックのかみづくりから出発して、「こうぞ」からの和紙づくりをしたことがあるが、これはたまたまにうれしい体験で、私にとって世界への意味づけを、ものづくりを通して体験できたはじめてといえるプロセスで、そこではじめて学校というイメージを、競争し人を命令により支配し支配される場、つまり学ぶ＝消費する場であるというものから、信頼でき、協力を学びあえる場、つまり学ぶ＝生産する場であるというものに作り変えるきっかけをもてたのである。

## 10) 自己表現に比重をおいた学習方法

それと同等にフレネの教育やフレイレの識字教育、解放教育、生活つづりかた教育などにみられる自己表現＝自分の世界の探索、記述、意味づけに比重をおいた教育も面白い＝有効ではないかと思う。

また、イメージ誘導やいくつかのグループエクササイズによって、自分や他者についての関係性の理解を目標とする活動も（それはアドラー心理学そのものの勇気づけのプロセスの一端であるが）、ひとたび体験すると、みんなはそれを求めるのであって、実践をつんでいく意味やニーズは十分あると思われる。

ストーリーテラーの魅力も大きなものがあると思う。しゃべり＝講義も「話す」という行為の

中で人生への意味づけを教師が表現できたとき、そして十分な関係性の中で生徒が「聞く」といふ行為の中で人生への意味づけを与えていくときには十分な力を持つのだろうと思う。(林 竹二氏の授業など)

## 11) 人生の一瞬間実現の授業テクニックのキーポイント

そこで、わたしたちがふまえておくべきキーポイントはなんだろうか。「わたし」がコミュニケーション＝意味づけをつくりだし、「わたし」が今まで与えられていた世界像を変更していく過程として、授業を認識できるかどうか、というところにあると思う。

教師は、まず自分自身、そして生徒がもっているさまざまな思いこみから一回解放され、一旦否定されるプロセスを授業の構造自体におりこんでいく工夫をしていく必要があると思う。そうであって、はじめて世界像を変更していく過程を驚きをもって体験できるから。そのうえであらたな情報をわたしの人生の一部として意味づけていく活動ができるのだと思う。

## 12) システム＝所属の場として

教師役を演ずる「ひと」が、教室という共同体に適切に所属し、生徒役を演ずる「ひと」も同様にそこに適切に所属する。そのような各人がそれぞれの(各人の権利と責任を遂行する)立場で人生の主人公として主体的にその場に所属したいというニーズは、おそらくわくわくというニーズが実現されたとき、同時に実現されやすいという可能性をもっているのではないか。

以上のような個々の教師と生徒の活動(ニーズの充足)をつくり出す条件(所属の場づくり)として、教育のシステムづくりは考えられていったほうがよいし、マクロとしての教育の状況なり環境を考え、論じる有効性はそのレベルにあると思う。校長そして教育行政の役を担う者の意識が厳しく問われるのも、その限りにおいてであろう。

## 13) 終わりに

授業という歴史的な場において、人と人との関係性が、その場にいる関係者によって主体的に担われ、形作られ、創造されていく。そこにおいて成立することがらのなにほどこかを、教育のニーズとしてのわくわく、うきうき、どきどきという情動は、指し示すのである。そこにおいてのみ、「ひと」は自分の人生において主人公として存在しえるのである。そしてそこにおいてのみ、(無意識的にも意識的にも)教師としてふるまう「ひと」は、(無意識的にも意識的にも)生徒としてふるまう、あるいはふるまいを強制させられている「ひと」に出会い、それら「ひと」は各人が主人公でありつづける「学び方を学ぶ」可能性を持つのである。

その意味で、わくわくというニーズの実現は、いついかなる場にあっても(公教育、教育産業、アウシュビッツ収容所、少年院などなど)、「わたし」が実践するという「個人」の記銘性を十分有するものであり、そうであるがゆえに、現代社会の根底的な疎外(脱個人性、非人間化といってもよい)の呪縛から解放される可能性を持つことだろう。

そのニーズは、教師という職業を選んだものにとってきわめて根源的なニーズであり、それに答え、そのあり方を自覚しなければ、私たちは永久に教師という仮面をかぶり、「人生のうそ」

をつき続けていく。それは、あくまでも教師役を選んだものの私利私欲に基づくニーズであり、教師の都合にあったものである。その自覚をもとに教育のさまざまな技法を身につけ、実践していくことが、生徒役を演じる人達と勇気づけあいながら誠実に生きる道であろう。

#### 更新履歴

2012年6月1日 アドレリアン掲載号より転載